

ペン俳句会 句会報(三五十七号)

令和六年六月六日(木)

兼題『初夏』、席題『空』

句会を、今年五月と同じ場所で開催。出席は十名

(大阪の金魚姫さん欠席)。(投句十一名)

中村 晃也

玉葱の同心円を串に刺す

夏空や阿蘇は一望草千里

初夏の風信濃はどこも水の音

おんおんと瀬戸にさし来る青葉潮

島の子の見上げる空や夏来る

筆ペンのやうなアスパラ束で買ふ

宮原 凧

風をきるペダル軽やか夏来たる

ガタガタと軋む朝戸や梅雨に入る

ネモフィラの揺れ群青の風生まる

牛乳の空瓶に生く薔薇一輪

夏空や全面ガラスエレベーター

初夏の穴あきジーンズ闊歩せり

松田 一文字

命日や蜥蜴のしっぽ青光り

初夏や水琴窟に耳を寄せ

おのが影に追はるる揚羽そら真青

初夏の空にタワーやビル壊し

じやがいもの花の白きに小糠雨

水田の渺渺たるや初夏の風

長尾 進一郎

早起きの子らの歓声夏を駆く

新緑の葉を透きて来し陽の光

冷蔵庫飲み物ばかり棚を占め

夏始川面に光る魚の影

生まれたての金魚の群れて池探検

堰を越へし水の白さや夏始

安藤 晃二

塩船や若葉に映ゆる観音堂

開山は尼僧と聞けり山紫陽花

つつじ谷早や焼き尽くす夏日かな

赤松の枝振りの分く初夏の空

ふるさとや机閑散田植えの子

真青なる空にひしめき薔薇赤し

大津 そうかい

現し世は色即是空とてん

讚へ合ふ鳥とせせらぎ聖五月

薫風やベンチに眼鏡忘れられ

下駄履きの路面電車や夏初め

どこまでも葦原白鷺どこまでも

白南風やケーブル眼下多島海

浜口 金魚姫

光線もて星追いかけて夏の空

夏夜空レーザー光に星たどる

十葉は十字架掲げ攻めて来し

柏葉紫陽花ロケット発射八方に

星は点我也点なり夏の空

十葉咲きてより裏庭と呼ばれ

志村 良知

美(うま)し時汝産みしと母初夏に

今朝藍の天辺に伸ぶ初夏の富士

五月空ポロシャツ求む旅ごころ

生ハムの塩気が合ふね豆ごはん

空と水植田の畷広やかに

姉の家空木の花の際立ちぬ

森田 元斐

ぎこちなく見る腕時計新学期

若竹の短命を伐る勝手裏

空いた席譲る少女の白いシャツ

軒の間に空を求めて鯉のぼり

つとつどの飛距離更新雀の子

鶯に和して乱れず時鳥

新田 ゆふき

五月雨に窓開け放つ珈琲館

時はいずこへ踏む足の初夏に揺れ

五月雨や湯の花匂ふ須雲川  
昼顔やけさのフエンスに六つばかり  
窓に聴くレールの軋み梅雨の入り  
空になる心重きや梅雨の空

西川 知世

老鶯の空を止めて夕日燦  
初夏の田の面静かに鶯一羽  
葉桜を打つ雨の音家籠り  
鳥声を守る楠大樹夏来る  
紫陽花のあをに潜める力かな  
走り梅雨姉の電話のながながと

次回は令和六年七月四日(木)、

兼題は季語「菖蒲」含む一切(中村晃也さん出題)、  
席題は西川知世さん出題の「水」です。

季語を学ぶ 初字にかえって

西川 知世

兼題は「菖蒲」を含む一切。一切を考えて見る。  
菖蒲は歳時記、植物の項に「菖蒲」として立つが  
傍題に菖蒲園・菖蒲池・菖蒲田…と広がる。一切  
と範囲を広げると「生活の項」にもたくさん菖蒲  
が出てくる。

「菖蒲酒」解毒作用があるところから菖蒲の葉  
や根を刻んで浮かべたり、茎や根をそのまま酒に  
浸したらしい。「菖蒲の帷子」は節句以降、五月  
中着ていた帷子。「菖蒲の鉢巻」子の頭に鉢巻を  
撒き菖蒲を挿し、子供も大人も邪気払いしたそう。  
「菖蒲兜」「菖蒲刀」「菖蒲打」と子供の遊びを  
兼ねて成長を願ったことから。主に端午の節句に  
平安時代から近代まで、男子の初節句に成長を祈  
る、邪気を払うことに菖蒲は使われ、今でも旧家  
では大切な行事として残っているそう。

「溪蓀・あやめ」「花菖蒲・はなしょうぶ」が  
あり、アヤメ科。菖蒲はサトイモ科の多年草であ  
り、葉は瑞々しい緑で芳香を放つので、菖蒲湯に  
適しているらしい。皆よく似ているが、歳時記で  
は、別項。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒 芭蕉  
壁一重雨をへだてつ花あやめ 鬼貫  
旅人に雨の黄あやめ毛越寺 高野素十  
ひと日終へあやめの水に手をあらふ長谷川素十  
菖蒲園隅より水の忍び出で 平畑静塔  
夜蛙の声となりゆく菖蒲かな 水原秋櫻子  
くちつけてすみわたりけり菖蒲酒 飯田蛇笏  
花菖蒲夕べの川のにごりけり 桂 信子  
暮れてより白きあやめの盛りかな 草間時彦  
はからずも夕焼濃しや軒菖蒲 藤田湘子  
てぬぐひの如く大きく花菖蒲 岸本尚毅  
鎌の刃も菖蒲も雫してをりぬ ふけとしこ  
おかつばに菖蒲はちまきして来たり 安田孔甫